

The Scarlet Letter における Hester と「この世の楽園」の森

向井 久美子 (熊本学園大学外国語学部)

Hester and the Forest of “an earthly paradise” in *The Scarlet Letter*

Kumiko MUKAI

要 約

本論では、Nathaniel Hawthorne の *The Scarlet Letter* (1850) の結末における Hester Prynne の回帰が、森の影響によるものであったことを論考する。植民地時代のアメリカにおける森の歴史的、神話的、象徴的な解釈に関する議論は、本作品に関する先行研究においてもなされているが、森の存在は、ピュータニズムを背景とした悪魔との関わりによる苛酷な「荒野」か、あるいは正反対の有望な新天地である「楽園」かのいずれかで、二元的に解釈が進められてきたと考えられる。しかし、本論では「楽園」的な視点ではあるものの、全く異なったアプローチ、つまり森のもつ神秘的な自然力が、ヒロイン Hester の行動に終始大きな影響を与え続け、ヨーロッパでの一人娘の家族との幸せで平穏な暮らしを捨て、最後に単身で再びボストンに戻り、生涯、自身と同様、悲しい人生を送る女性たちの力となって生きることを決心させたということを考察する。母なる森の影響力や木々が放つ生命力が、波乱の人生を送り続ける Hester に自然の治癒力やエネルギーを与え、また彼女も森から与えられた同様な力やエネルギーを女性たちに与えるなどして、共感し合い相互にアレロパシクな作用をしながら生き抜くことを可能にさせた。最愛の人を亡くした Hester は、この地を離れた時には「荒野」とも思われた場所を、森の神秘的な力を得て「この世の楽園」に変え、「預言者として宿命づけられた女」として新しい道を切り開いていったのである。

はじめに

古代から植物と人間の関係は深い。キリスト教における樹木崇拝はもとより、人間と森の木々とは、ホメオパシーやデンドロエロティックな儀式など多種多様なつながりを持って関わってきたと考えられる。¹ 当然、森の周辺に暮らす人々は、日常生活において様々な形で森と相互に影響し関わり続けてきたと考えられる。ヨーロッパ文明において森が果たした役割について、W. H. Audenは〈野蛮〉という意味合いから始まったその役割は、〈悪魔的〉というニュアンスを添えつつ文明史を下降し、〈放埒〉、そして〈反秩序〉というような、政治上のタブーを具現するようになる（川崎 126）と時代に応じてその概念が変遷することを指摘しているが、それは新大陸にも当てはまると考えられる。

アメリカにおいては建国当時から、森は「荒野」と「楽園」のアンビバレントな存在であった。もともとアメリカの自然は、旧大陸では失われていた自然と共に平和な生活を行うことのできる「楽園」と、悪魔が支配し文明社会の法と秩序が及ばぬ場所で、その文明社会からの脱落者が孤独な生活を余儀なくされる「荒野」の二つの面がある（渡辺 35）と考えられてきた。また、アメリカン・ルネサンス期の作家たちにとって、森は創作活動に影響力を持つ“inspirational wilderness”である（Schramm 2）という指摘もされ、Hawthorne 作品においても、「楽園」の存在が示唆されつつも、ピューリタニズムの影響下にあるため、過酷な「荒野」として登場することが圧倒的に多い。もともと森は、Black Man が棲む恐ろしい場所² であり、主要人物たちに暗いネガティブな影響を及ぼす力を持っているとされている。初期の代表的短編小説“Roger Malvin’s Burial”（1832）や“*Young Goodman Brown*”（1835）における森は、因果応報の悲劇、つまり厳格な教訓が提示され残酷な人生が展開する舞台であり、その観客たる読者の前に繰り広げられるトポスであり、“an arena for the allegorical projection of character”（McIntosh 189）であったと考えられる。

The Scarlet Letter（1850）における、ニューイングランドの小さなコミュニティーに隣接する森はトポスであり、〈反秩序〉の具現化である緋文字は、カオスを生み出す。不義の愛を育むことを可能にしたこの森においては、その文字の不気味な存在が多く象徴や意味を放ち、最終的には反〈反秩序〉をも形成していったと考えられるのである。時間的な経過の中で、森は常に相反する意味を持ち、人々に影響を与えて続けている存在であった。つまり、「荒野」とも思われた森は、結末の Hester の行動によって、「楽園」への通過地点にある場所という可能性が暗示されているとも考えられるのである。川崎は「ボストンの町は、まさしくノモスの空間。それに対しては森はカオスである。それは聖処（アジール）にもなりうるはずだった。」（331）と本作品での森の様々な定義の解釈を提示し、さらに「ロマンスの森は祖型の森。だからそこには悪魔や魔女も集うが、文明の束縛を超えた高次の自由が発見されるかもしれない。」（331）と森の影響力は想像を超える場所となり別次元の自由を享受できる可能性を指摘する。

ヨーロッパ出身の Hester は、新大陸の住人よりも森に対して親近感やノスタルジーを感じていたはずである。森は Hester にとっては、世俗的な意味での善悪の行為の全てが行われたトポスではあったが、本質的には悪魔の恐ろしい巣窟ではなかった。まさに“a neutral territory”（36）で、不可思議な力を発している神秘的な場所だったのだ。素の自分をさらけ

出し、本能のままに自らの意志に従って素直に生きることでできた安らぎの住処でもあったのだ。森は太古の時代から、どんな無法者でも受け入れてきたが、その一人である Hester も、森に暖かく受け入れられ、自己の芯を変えることなく、己の信念を貫いて生きることができたのだ。彼女は森の中でのみ、「自由に」感情を表現することができ、Dimmesdale との愛を育むことができたと考えられる。Hester にとって、懐の深いこの森こそが真の故郷であり、再びこの地へ戻ってきた所以なのである。

Hawthorne 作品における森についての R. W. B. Lewis の伝統的な意見は、本論でも説得力を持つものである。

For Hawthorne, the forest was neither the proper home of the admirable Adam, as with Cooper; nor was it the hideout of the malevolent adversary, as with Bird.³ It was the ambiguous setting of moral choice, the scene of reversal and discovery in his characteristic tragic drama. The forest was the pivot in Hawthorne's grand recurring pattern of escape and return.

It is in the forest, for example, that *The Scarlet Letter* version of the pattern begins to disclose itself: in the forest meeting between Hester and Dimmesdale, their first private meeting in seven years. . . . But the energy aroused by their encounter drives them back instead, at the end, to the heart of the society, to the penitential platform which is also the heart of the book's structure. (114)

つまり「樂園」でも「荒野」でもない、道徳的選択が曖昧な設定としての森は、他の作品にもみられるような「逃避と回帰」のテーマが認められ、森という場所が Hester の人生のドラマの中心に据えられていると述べられる。実際 Hester は、一度は過去を全て「清算」して去ったような形で Pearl と渡欧するものの、不可思議な力に呼び寄せられたように、また一人でこの地へ戻り、森において新たに人生を始める。ただ、この森はもはや以前のようなイノセントで牧歌的な、いわゆる Cooper 的なエデンの園ではなく、また法と秩序が及ばない Bird 的な無法地帯というものでもない。そこには“moral wilderness” (183)、つまり「魂の荒野」を経験し傷ついた人々が共存できる、「別次元の」住処が存在すると考えられる。Hester は、生涯この場所で、自らの法と秩序に則って、自分と同様に「無法者」の人生を背負った女性たちと共に、森に生かされながら人生を全うすることを決めるのである。

従って本論では、これまで神話的で象徴的なコンテクストでしか解釈されてこなかった Hester と森との、より具象的なイメージを含めて読み直しを行いたい。Hester は森と不可思議な親密さや稀有な共感力によって有機的に影響し合いながら、閉鎖的なピューリタン社会を生き抜き、自らの自由意志によって、この地で土に帰ったことを論じたい。

1. 神秘的な共感力

Hesterにとって、森は Dimmesdale とさまざまな秘密を共有した特別な場所であり、ボストンの小さな森は、彼女の人生のさまざまな岐路に立ち会っていた。森は Dimmesdale との愛を育むことができた唯一の「限りのある」自由な空間であり、彼女の“a fatality” (79-80) が存在すると定められているアジールだったのである。この森の存在によって、Hester は真の意味で生きることができたと考えられ、どんなに試練を与えられても耐えることができたと考えられる。それに関してはテキストの“Her sin, her ignominy, were the roots which she had struck into the soil. It was as if a new birth, with stronger assimilations than the first, had converted the forest-land, still so uncongenial to every other pilgrim and wanderer, into Hester Prynne's wild and dreary, but life-long home.” (79-80) と、“roots” や “soil” など植物と関連した表現がなされており、さらに“stronger assimilation” という語には、Hester は罪を犯した場所である森との特別な親密性が生まれたことが示唆されている。

植物と人間との神秘的ともいえる繋がりや類似性に関する過去の研究に関して、さまざまな興味深い言及が認められる。Katherine Creath と Gary E. Schwarz は「ヒーリング・エネルギー」によって、植物が何かプラスの影響を受ければ、人間も同類の影響を受けるということを、また CIA の元尋問官 Cleve Backster は植物にポリグラフをかけて最終的に植物とそれを育てる人間との間に感情的な反応があることを“a special communion or bond of affinity appeared to be created between a plant and its keeper” (Tompkins and Bird 9) と指摘する。この Backster の研究を受けて、IBM の科学者 Marcel Vogel は、植物と人間が相互に影響を与え合い、植物が人間に与えるポジティブな力について “[Plants] radiate energy forces that are beneficial to man.” (Tompkins and Bird 24) と声明する。これは医学の祖 Paracelsus が指摘する「共感的類似説」に通じるものであり、Dorothy Maclean が “According to his ‘doctrine of sympathetic resemblances’ all growing things reveal through their structure, form, color, and aroma, their peculiar usefulness to man.” (Tompkins and Bird 307) と植物が人間に与える特別な有用性について説明を加える。さらに植物と人間のスピリチュアルな関係について、Maclean の実体験が以下のように説明される。⁴

She learned from the aromatic plants in the garden that their unique wavelengths could serve special functions for humans, affecting different parts of human anatomy as well as the human psyche, some plants being good for wounds, others for eyesight, others for human emotions. She realized that by raising the quality of her own vibrations she might eventually open the doors to a whole new spiritual realm of plant life. It became clear to her that human thinking, human passion, human anger, human kindness and affection, all have far-reaching effects on the world of plants, that they are most susceptible to human thoughts and emotions, which affect their energy. Poisonous and bad-tempered moods have as depressing an effect on plants as happy, uplifting frequencies have a beneficial effect. (Tompkins and Bird 368)

Maclean は、植物と人間には想念や感情を通して相互に影響を与え合う特有の親密性があり、人間は植物から精神的な面、特に感情的な部分に至るまでもさまざまな影響を受ける可能性がある」と指摘している。

確かに *The Scarlet Letter* のテキストにも、人間と植物の共感的類似説に沿ったような比喻表現が認められる。緋文字をつけた Hester の社会的な地位に関して、“All the light and graceful foliage of her character had been withered up by this red-hot brand, and had long ago fallen away, leaving a bare and harsh outline, which might have been repulsive, had she possessed friends or companions to be repelled by it.” (163) と周囲から反感を持たれかねないようなとげとげしい状態になってしまっていると、木で例えられている。Chillingworth と植物との関わりにおいても、Hester が “Would not the earth, quickened to an evil purpose by the sympathy of his eye, greet him with poisonous shrubs, of species hitherto unknown, that would start up under his fingers?” (175) と想像する箇所では、強い連鎖を感じさせる表現が認められる。

また、Pearl に関して、“She accompanied this wild outbreak with piercing shrieks, which the woods reverberated on all sides; so that, alone as she was in her childish and unreasonable wrath, it seemed as if a hidden multitude were lending her their sympathy and encouragement.” (210) と、人間と森との特別な親近感で呼応し合うような描写がなされている。彼女は耳をつんざくような不快な金切り声を発し、森の中で自分の本能的な欲求のままに感情をさらけ出し自由に振る舞っているが、森はそれすら温かく包むように共鳴しているようである。

Hester と森の神秘的な親密感、森で彼女が自ら胸の緋文字を外して心の重圧が取り払い解放感を得て、内なる女性性が湧き出て来ると共に、本来の彼女の人間性そのものが露わになった時に明らかとなる。自然の方から、彼女に共鳴し呼応しながら “the magic circle” (202) に集まってきたという表現が認められる。

And, as if the gloom of the earth and sky had been but the effluence of these two mortal hearts, it vanished with their sorrow. All at once, as with a sudden smile of heaven, forth burst the sunshine, pouring a very flood into the obscure forest, gladdening each green leaf, transmuting the yellow fallen ones to gold, and gleaming adown the gray trunks of the solemn trees. The objects that had made a shadow hitherto, embodied the brightness now. The course of the little brook might be traced by its merry gleam afar into the wood's heart of mystery, which had become a mystery of joy. (202-03)

森のポジティブな力が、Hester を含む周辺全体に及んでいるかのような楽観的な表現である。明らかに Hester に親密感を持つ自然は、決して恐ろしい悪魔的な存在ではなく、Dimmesdale との愛をも容認し、二人と調和し共鳴しながら神秘的喜びを共有する存在であるように思われる。森の共感力は、確かに生命力を高めるような影響を、二人に与えている

ようである。

Such was the sympathy of Nature—that wild, heathen Nature of the forest, never subjugated by human law, nor illumined by higher truth—with the bliss of these two spirits! Love, whether newly born, or aroused from a deathlike slumber, must always create a sunshine, filling the heart so full of radiance, that it overflows upon the outward world. (203)

何かを決断し行動に移す時には、Hesterは必ず森に引き寄せられ、そこで自分の真実の姿を見つめ直し、その神秘的な親密性や共感を糧に不思議な力を得ることができたと考えられる。こういった稀有な共感力は一種のアレロパシー（他感作用）と考えられ、自然と相互に影響し合っているのである。⁵ Hesterは、余生を自分と同様に、何らかの理由で不遇な状況となった、この森の周辺に住む女性たちと共に過ごし、その生活の中で森から受けた神秘的なアレロパシクな共感力も、皆と互いに受け与えながら生きていくことになるのである。

2. 森とファンタズマゴリックな心模様⁶

ボストンに到着後からずっと、Hesterは人々の目から決して逃げ隠れせずに、湾を隔てた西側の森におおわれた山々が見渡せる海辺の小屋で暮らしていた。Hesterは胸に秘めたDimmesdaleへの愛を持ち続けながら、閉鎖的なピューリタン社会で生き抜こうと決める。生得的な強い意志やエネルギーで様々な困難を乗り越えたHesterは、7歳になる娘Pearlと親子三人で新天地で人生をやり直そうと話を持ちかける。しかし、この時ようやくDimmesdaleにその気は全くなく、自分に対する愛もないことを悟る。その後ほどなく彼が亡くなり、もはやこの地で生きる理由がないと感じ、失意のうちに、娘と二人でヨーロッパに渡り、彼の地で幸せで平穏な生活をしていた。しかし何故か、何の支えもない、心身共に過酷な苦しみの記憶しかないはずのボストンに再び戻ろうと決心するのである。自分の犯した罪がまだ完全に償われていないという罪悪感が彼女に残っていたかもしれないが、彼女の一方的な愛ではあったものの、生前はDimmesdaleと偶然にでも会うことのできた森、そしてその彼との様々な思い出が残っているその場所は、変わらず悠然と構えているはずであり、そこを通る度に神秘的な力が充電され、彼女なりに本来の自分を取り戻すためのエネルギーや生命力を得られた経験の記憶があって、無意識にも戻ろうとしたのかもしれない。この地というよりも、森との生活に回帰し、余生を過ごしながら、最後まで自分の真の生き方を貫こうとしたように思われる。

Hesterにとっては、森は間違いなく一つの“a neutral territory”である。そこで繰り広げられた一連の出来事は、まぎれもなくrealityであった。一方、DimmesdaleにとってHesterとの恋愛沙汰は、一時の気の迷いから過ちを犯し、自らは認めたくない欺瞞と偽善に満ちた人生やそこからの逃避行動であり、つまりはfantasyであったのだ。ただ、作家Hawthorneにとって、森は多くの示唆に富んだ存在であることは間違いない。レオ・マークスも指摘し

ているように、筆者は時に「ほとんどまったく活動を止め、自然の妙なるさまを悠々と沈思し、時おり想像力をかけめぐらせるという贅沢をする一人の人間」(14)であり、また時に森の静寂の中にいると、突然、汽車の汽笛が聞こえてきて心を悩まされ、「そのために牧歌的な夢想と相いれない現実を認めざるをえなかった... 俗世間を逃れることの喜び——素朴な空想の喜び——への一般的礼賛で始まったものが、機械という要素が入るこむことにより、はるかに複雑な精神状態へ転化された」(16)とも考えられる。つまり、Hawthorneにとって、“a neutral territory”は reality と fantasy の中間地帯という単純な領域ではなく、その全ての領域を包含する continuum だと理解できる。本作品の時代設定としては、作者がコンコードで実際に汽車を目にし、鉄道による産業や近代化の波が押し寄せ、田園の理想が喧噪や工業的發展で破壊され、荒野までもが消え去っていくことも肌で実感していたはずである。

しかし本作の中では、たとえ幻想であったとしても、「楽園」という場所は存在していたのである。この「楽園」に辿りつこうとしながら、Hester は自分なりに意志を貫き、自分なりの方法で贖罪の人生を全うしようとした。その途上で、森の木々や植物との相互的な影響を受け与えていたのである。原始の森は、神秘的で鬱蒼とした暗い影を落しながら、一方では、日光の明るい輝きが、その先のかなたに認められる場所である。Hester の人生において、これから先に一縷の望みが持てる可能性を示す表現が、テキストで以下のように示唆されている。

It [The road] straggled onward into the mystery of the primeval forest. This hemmed it in so narrowly, and stood so black and dense on either side, and disclosed such imperfect glimpses of the sky above, that, to Hester's mind, it imaged not amiss the moral wilderness in which she had so long been wandering. The day was chill and sombre. Overhead was a gray expanse of cloud, slightly stirred, however, by a breeze; so that a gleam of flickering sunshine might now and then be seen at its solitary play along the path. This flitting cheerfulness was always at the farther extremity of some long vista through the forest. (183)

Hester にとって、森は“moral wilderness”を象徴するものでもあった。その森は、風や雲や日光などの自然条件などによって、さまざまな様相を呈しながら、Hester の精神に影響を与えてきたかのように考えられる。Hester にとって、森という“moral wilderness”は、素の自分をさらすことができ、時には非情とも思えるような仕打ちを傍観し、また時には予想だにできなかったほど暖かく包み込み共感しながらも、彼女の意志と選択で生きることを尊重してくれる「楽園」と解釈できるのである。

そうした「楽園」の存在を信じながら強く生きている Hester は、もはや自分のことを人なのか影なのかも判別できなくなっているほど衰弱している Dimmesdale 牧師に、森の中で Chillingworth が夫であると正体を明かし、それでも自分たちの愛が決して間違っていないことを臆することなく “What we did had a consecration of its own. We felt it so! We said

so to each other! Hast thou forgotten it?” (195) と主張し、お互いの苦悩を共有し理解し合っているのだ、と二人の愛を正当化しようとさえする。一方、二人を包む森は、決して祝福しているわけでも非難しているわけでもないが、ただ前途が楽観的なだけではないと匂わせる予言とも警告とも思える様相を示す表現が読みとれる。

Life had never brought them a gloomier hour; it was the point whither their pathway had so long been tending, and darkening ever, as it stole along;—and yet it inclosed a charm that made them linger upon it, and claim another, and another, and, after all, another moment. The forest was obscure around them, and creaked with a blast that was passing through it. The boughs were tossing heavily above their heads; while one solemn old tree groaned dolefully to another, as if telling the sad story of the pair that sat beneath, or constrained to forebode evil to come. (195)

こうした不明瞭な状況をもものともせず、Hester は森の神秘力を味方に、新天地で人生をやり直そうと Dimmesdale に強く提案する。

“Is the world then so narrow? . . . Whither leads yonder forest-track? . . . There thou art free! So brief a journey would bring thee from a world where thou hast been most wretched, to one where thou mayest still be happy! Is there not shade enough in all this boundless forest to hide thy heart from the gaze of Roger Chillingworth?” (197)

しかし、この期に及んでも、これほどの力強い言葉に対しても Dimmesdale は頑なに、過去の自分の功績、つまりこれまで守ってきた牧師としての人生を、捨てるという決心はつかなかった。森を通り抜け海を越え、新天地でまさにゼロからやり直そうと、Hester は Dimmesdale を説得しようとするが、高名な聖職者としての自分に執着している彼にとって、別人間に生まれ変わる事など到底できなかったのである。Hester の再出発の提案は、純粹に愛ゆえのものであったが、Dimmesdale にとっては、自分の過去の「全て」を認識できず捨てさせようとする「鈍感な一教区民」である彼女に、このような提案をもちかけられるのは、死に匹敵するほどの耐え難いものだったである。森の中で素の自分を解放した Hester は、心の底から思いの丈を表現し、一緒に新天地へ行きたいということだけを優先させたのであって、Dimmesdale という人間を根本的に理解しようとしていなかったことに非はあったのだろう。

森は、そういう孤独な Hester の全てを包み込み、彼女に通常の人を感じる寂しさや恐怖心などにもものともしない強さの根源を与えていたのであろう。また Dimmesdale に対しては、罪悪感や偽善を隠し通すことのできる冷静さや不動心を与えていたのかもしれない。Hester は、既に森を自分の住処の一部とし、“She had wandered, without rule or guidance, in a moral wilderness; as vast, as intricate and shadowy, as the untamed forest, amid the

gloom of which they were now holding a colloquy that was to decide their fate. Her intellect and heart had their home, as it were, in desert places, where she roamed as freely as the wild Indian in his woods.” (199) と、彼女の自由意志を得ていたのである。

しかし、Hester が最も “hateful token” (211) とその存在を忌み嫌い、畏れている緋文字を森でも隠すことはできない “The forest cannot hide it! The mid-ocean shall take it from my hand, and swallow it up for ever!” (211) と声を大にする。森の木々は、Hester の行動を全て見聞きしながら、それを様々な形で人々に伝えようとしているものの、“The dell was to be left in solitude among its dark, old trees, which, with their multitudinous tongues, would whisper long of what had passed there, and no mortal be the wiser.” (213) と、森とのアレロパシクな感応力を持った人でなければ知りえないとも示唆しているようである。森から戻って来て別人になったかのような牧師 “Another man had returned out of the forest; a wiser one; with a knowledge of hidden mysteries which the simplicity of the former never could have reached” (223) は、多少のアレロパシクな感応力があつたのかもしれないが、本質的に性質を変えることはなかったと考えられる。

Hester は、ボストンでの人間関係では “moral solitude” (234) を感じ、自分の内面を出して深く付き合うことは難しかったが、森の木々との間にはこのような蟠りは一切感じることはなく、心身ともに共感力を持ちながら同化していたのではないかと考えられる。選挙祝賀で説教をすることは、Dimmesdale にとって人生最大の桎梏舞台であり、Hester にとっては、自分たちが公衆の面前で愛情を確かめ合うはずでもある場所だった。しかし彼女は、彼にとって自分は何者でもない存在であることを実感し、その絶望感が以下のように示される。

One glance of recognition, she had imagined, must needs pass between them. She thought of the dim forest, with its little dell of solitude, and love, and anguish, and the mossy tree-trunk, where, sitting hand in hand, they had mingled their sad and passionate talk with the melancholy murmur of the brook. How deeply had they known each other then! And was this the man? She hardly knew him now! . . . Her spirit sank with the idea that all must have been a delusion, and that, vividly as she had dreamed it, there could be no real bond betwixt the clergyman and herself. And thus much of woman was there in Hester, that she could scarcely forgive him (239-40)

こうした孤独と喪失感と幻滅を感じながらも、Hester は自分の原点ともいえる場所が森であったことを再認識する。森で、彼と出会い、愛を育み、悲しみを分かち合ったはずであるが、それらは全て “delusion” であり、二人の間に “real bond” など全くなかったと実感する。Hester は、未練を断ち切るためにも、失意のまま新天地へ旅立つことを一度は決心せざるを得なかったのである。

おわりに——母なる森へ

Hesterは若い頃、森の向こうへ行くことをずっと夢見ていた。それは愛する Dimmesdale と娘 Pearl と家族だけの安住の地を見つけ出そうとしてのことであった。結局、それは叶わなかったものの、愛や罪悪感などからではなく、最後には一人で帰って来て、ここを終の棲家とした。彼女は人生で何をなすべきかをようやく悟り、どんな苦難の時も自分を温かく受け入れてくれた、自分を育ててくれたアジュール、つまり彼女にとっての“an earthly paradise” (11) に戻ってくることを意味したのである。懐かしく忘れられない森のアレロパシクな神秘的な力を受けた感覚も心地よさと共に残っていたのかもしれない。これは一種の帰巢性、つまり本能的に母なる地へ戻ってくる母森回帰、あるいは母胎回帰⁷ と解釈できるかもしれない。

Hesterは姦通の象徴である緋文字と共に、長年ピューリタン社会で成長しながら生きてきた。愛する Dimmesdale には何ら手を差し伸べられることのない孤立無援の状況で、想像を絶するような苦難の日々を送って来た。彼女は、自分に対して愛情のかけらも持っていなかった Dimmesdale の弔いのために戻ってきて、ここで永住する必要はなかった。しかし、彼女は戻ってきた。森は相変わらず生命力に溢れ、彼女を豊かな共感力で包み込む。彼女にとって、森は“moral wilderness”の象徴でもあり、ありのままの彼女を受け入れてくれた母なる自然でもあったのだ。地味な装いをした Hester が、影のようにひっそりと昔住んでいた小屋に入っていくところを、近所の子どもたちに目撃されるが、以前のような偏見と好奇心な目で彼女を見る人はもういない。

Hesterは再び自らの意志で緋文字を付けて、この地で生活を始める。その無私無欲の献身的な生き方に敬意を持つ女性たちや、何らかの理由で悲しい人生を送っている女性たちが、次々と彼女に悩みを打ち明けたり、相談をしに来るようになる。そうした Hester とその女性たちの有様は、まるで1本の木が周辺の木々に作用し、互いに影響し合い、寄り添いながら森を形成しているようで、木々と森との間に存在するものと同様な、人々の間のアレロパシー効果の存在を裏付けているかのようであった。Hesterも、社会的に弱い立場にあり、傷心の女性たちと共にコミュニティーを形成しながら、その中でうまく共存してゆき、人生を全うしていったのであろう。そうした中で、傷ついた女性たちの話を聞きながら、Hesterは自分なりの想いを確信していく。

Women, more especially—in the continually recurring trials of wounded, wasted, wronged, misplaced, or erring and sinful passion—or with the dreary burden of a heart unyielded, because unvalued and unsought came to Hester's cottage, demanding why they were so wretched, and what the remedy! Hester comforted and counselled them, as best she might. She assured them, too, of her firm belief that, at some brighter period, when the world should have grown ripe for it, in Heaven's own time, a new truth would be revealed, in order to establish the whole relation between man and woman on a surer ground of mutual happiness. (263)

これはまさに預言とも解釈できるものであるが、彼女はこのような解釈をきっぱりと否定するが、人々が互いに幸福になれる関係を築けるような社会が、きっと実現するだろうという楽観的な望みを語る。

しかし、Hester は Dimmesdale との神聖な愛を信じていたが、それが全くの思い込みと幻想であったと自覚した時から、自分はこの世に生きる他の女性と同じ、心の拠り所と生きる目的を失った、一人の弱い存在であると認識し、預言者になれるはずもないと思い知る。これこそ彼女が人生において真に会得したことであった。

Earlier in life, Hester had vainly imagined that she herself might be the destined prophetess, but had long since recognized the impossibility that any mission of divine and mysterious truth should be confided to a woman stained with sin, bowed down with shame, or even burdened with a life-long sorrow. The angel and apostle of the coming revelation must be a woman, indeed, but lofty, pure, and beautiful, and wise; moreover, not through dusky grief, but the ethereal medium of joy; and showing how sacred love should make us happy, by the truest test of a life successful to such an end! (263)

Hester は森で多くを経験し、学び、自分の真実の姿を知る。その森に戻ってきた Hester は、その神秘的な共感力と親密性を感じながら、生命力を得て人生を歩み始める。Leo B. Levy は “She and the minister are united in their compliance to the religious sublime, but it is the false sublime that conveys the force of the unalterable law that separates them” (392) と二人の虚偽の関係を指摘しているが、Hester が森に戻ってきたのは、愛を成就させたり、昇華させたりしたといったためではなく、本能的に呼び寄せられ、自分の意志によって人生を全うするためだったのである。この地で、彼女は真実の愛を求めたものの、それは、自分なりの生き方を追求するプロセスであったのであり、森はその全てを見守ってくれたのである。その森の懐こそが、彼女が最後に戻るべき唯一の場所、彼女の「楽園」となった特別な場所だったのである。彼女はそこで「高次の自由」をも享受できたのであろう。

注

- 1 ルネサンス以降、人間と木々の間の密接な関りの一つとして樹木性愛（dendroeroticism）という慣習があり、植物界の豊かな実りを願う豊饒信仰の一形態として存在している。また森の木々の豊かな生命力にあやかり、人間も子宝に恵まれようと願う種類の呪術も存在し、人間と植物とのホメオパシーにもとづく行為は連綿と続いている。（川崎 21-22）
- 2 テクストでの Hester のセリフから明白である。“Are thou like the Black Man that haunts the forest round about us? Hast thou enticed me into a bond that will prove the ruin of my soul?” (77) 以後、引用文献に示した *The Scarlet Letter* のテキストからの引用はカッコ内でページ数のみ示す。
- 3 Robert Montgomery Bird (1806-54) は *Nick of the Woods; or, The Jibbenainosay* (1837) で、ネイティブ・アメリカンの大虐殺に復讐する白人と戦いを描き、登場するネイティブ・アメリカンは “bloodthirsty barbarians” で、James Fenimore Cooper の “noble savages” とは全く異なる存在である。cf. *Encyclopedia Americana* vol. 3, pp. 729-30.
- 4 Dorothy Maclean (1920-2020) は、カナダの元外務省職員で、スコットランドで Findhorn 財団を設立し、イスラム神秘主義の研究や実験菜園などを行った作家兼教育者。現在も Findhorn 在住である。cf. <https://www.findhorn.org>.
- 5 藤井義晴は、植物のアレロパシー（他感作用）の一般的な定義——植物が放出する化学物質が他の生物に及ぼす阻害的、あるいは促進的な何らかの作用——を提示した上で、さらに、動物などによる能動的、あるいは拡散的に放出される化学物質が同種の別の生物個体における発生、生育、健康、栄養状態、繁殖力などやこれらの要因となる整理・生化学的気候に対して何らかの作用や変容を引き起こす現象まで解釈できる（471）、と定義している。
- 6 物語が始まってすぐ、Hester がさらし台の上で衆人の侮蔑の的となりながら刑罰を言い渡される際に、次々と走馬灯のように頭の中でイメージを駆け巡らせ、現実逃避をして乗り切っていた精神状態を示す表現があり、そこで彼女の性格的な強さも暗示されていると考えられる。cf. “Possibly, it was an instinctive device of her spirit to relieve itself by the exhibition of these phantasmagoric forms, from the cruel weight and hardness of the reality.” (57)
- 7 Freud 派といえる精神分析学者の Otto Rank が、人間の精神的、神経的不安状態は、母胎から離れ出た出生の状態から起こり、同時に母親の胎内に回帰しようとする本能的な意識があると述べている。（ランク 48）また、高島まり子は、作者の状況をも含め、ユング心理学や精神分析的な立場から、「まるでテキスト『緋文字』のロマンス世界が、母と故郷を対象とする〈母胎復帰〉の憧憬に導かれた作者の〈夜の航海〉——ディムズデイルとヘスタにとって、母なる〈森〉が果たす役割と同様の——であるかのような印象さえ受ける。（105）」と述べている。

引用文献

- Creath, Katherine and Gary E. Schwartz. "Measuring Effects of Music, Noise, and Healing Energy Using a Seed Germination Bioassay." *The Journal of Alternative and Complementary Medicine*, vol. 10, no. 1, 2004, pp.113-122.
- Hawthorne, Nathaniel. *The Scarlet Letter. The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*, vol. 1, edited by William Charvat et al., Ohio State UP, 1962.
- Levy, Leo B. "The Landscape Modes of *The Scarlet Letter*." *Nineteenth-Century Fiction*, vol. 23, no. 4, 1969, pp. 377-92.
- Lewis, R. W. B. *The American Adam*. The Univ. of Chicago Press, 1955.
- McIntosh, James. "Nature and Frontier in 'Roger Malvin's Burial.'" *American Literature*, vol. 60, no. 2, 1988, pp. 188-204.
- Schramm, Karen Nancy. *The Inspirational Wilderness: The Role of the Forest in the Literature of the American Renaissance*. The University of Delaware, 1991.
- Tompkins, Peter and Christopher Bird. *The Secret Life of Plants*. 1972; Harper, 2002.
- オットー・ランク 『出生外傷』 細澤仁 他訳 みすず書房, 2013.
- 川崎寿彦 『森のイングランド』 平凡社, 1997.
- 高島まり子 「神話的イメージの連鎖——ヘスターとデイズデイルの「夜の航海」を中心に——」 『鹿児島女子短期大学紀要』 vol. 38, 2003, pp.101-39.
- 藤井義晴 「植物のアレロパシー」 『科学と生物』 vol. 28, no. 7, 1990, pp. 471-78.
- レオ・マークス 『楽園と機械文明』 明石紀雄 他訳 研究社, 1972.
- 渡辺利雄 「アメリカ文学と自然——パラドックスとディレンマ——」 『アメリカ研究』 vol. 1975, no. 9, 1975, pp. 33-54.

Hester and the Forest of “an earthly paradise” in *The Scarlet Letter*

Kumiko MUKAI

Summary

Hester Prynne, in *The Scarlet Letter* (1850), while bearing hardships, pursued her way of life and nurtured her love for Dimmesdale throughout her life in the mother forest. It was “an earthly paradise” to her, and she lived most of her “real” life and followed her will until the end. A mysterious communication seems to have been established between her and the forest. Whenever she returns to the forest from other places, it calmly welcomes her and accepts her as she is. Enjoying the power, she acquires an indomitable spirit and extraordinary flexibility, which are essential elements to continue living in the harsh Puritan community. For her, the forest is never a harsh “wilderness” in the traditional ideal of nineteenth-century America.

Although Hester enjoyed living in Europe with her daughter Pearl’s family after Dimmesdale’s death, she returns to the same small community in Boston alone. Inexplicable, nostalgic feelings may stimulate her, or the mysterious allelopathic effects of the forest may impel her back with a letter A. She resolutely restarts a new life in order to help her female companions there. The forest wraps and heals them all and remains “an earthly paradise.”